



この琵琶は、正倉院に伝わる五面の四絃琵琶のなかで、最も良く旧態をとどめるものである。槽の遠山の尖端部に「東大寺」の刻銘がある。

槽・軀手・覆手を蘇芳染めの楓、海老尾を黄楊木で造り、螺鈿や琥珀を嵌め込み、華麗な集合花文、飛鳥などの文様を飾る。腹板には散孔材を用い、革製の捍撥を貼り、絵を描いている。腹板の捍撥に描かれた絵は、正倉院絵画の代表的遺例として名高く、その図様は白象に乗り奏楽、舞踊する胡人と唐児を複雑な山水の構成のなかに配した興味深いものである。

平成四年、五年の螺鈿・貝殻材質調査によってこの琵琶に螺鈿の材としてヤコウガイとともに正倉院宝物中唯一、アワビが使用されていることが明らかとなった。

他の四面の琵琶には紫檀材が用いられているが、この琵琶では蘇芳染めの楓が用いられていること、あるいは下地の顔料がわが国固有の白色顔料であるらしいことなど、この琵琶の由来が他のものとは違ったものであることを伺わせる用材的な特徴が従来知られていたが、螺鈿材からも同様なことが言えるようになったわけである。

（成瀬正和）

正倉院御物の螺鈿材料はほとんど全てがヤコウガイで、恐らくその時代貴重であった原材料を余すところなく用いている。良く研磨された真珠層の片隅に僅かに緑褐色の稜柱層が残っていたり、複雑な反射光を示すのは殻軸や太い螺肋のあたりを利用したものであろうか。ところが、この蘇芳染螺鈿琵琶のみは一部に明らかにアワビの殻を用いたところがある。アワビ殻はヤコウガイの反射と異りとくに紅色系と青色系の干渉色が強く、とくに殻口外唇の広い部分は殻表の螺肋と一致する縞状の反射光が特徴的である。また小片でもヤコウガイの黄白色系の反射光とは異なる。

（奥谷 喬司）



2



1



4



3

正倉院の大幡に用いられている動物窩文錦

連珠円文、樹下双獣文、狩獵文等は、ササン朝ペルシャの錦文に多くみられ、ペルシャ式の文様といわれる。それらは、中国唐に渡り、唐の工人達はペルシャの錦文に啓発されて当初忠実に模倣したと考えられている。スタインは、ペルシャの錦文を模倣した唐産の錦をシノイラニカ様式の錦と呼んだ。正倉院の犀円文錦、法隆寺の獅子狩文錦、トルファン出土の花樹対鹿文錦、アンティノエ出土の天馬文錦等は、その代表的遺例とされている。

しかし、ここに挙げた四種類の動物窩文錦（1〜4）は、動物が唐草の円帯に囲まれていたり、中国式の唐花文の形式にあらわされていたりして、もはや最盛期のシノイラニカ様式の錦とはいえないものである。鳳形錦は、吉字を織り出した同文の錦がトルファンから出土しており、シノイラニカ様式の特徴がやや色濃く残るともいえるが、いずれにせよササン朝ペルシャの意匠に忠実なものではなく、中国唐の意匠がかなり融合している錦とみなすことができよう。

（尾形充彦）